句で「瘦同失雌鶴」と同表現をしている。又、白詩の「明月七盈虧」の表現を、道真は一三八句で「九見桂華圓」と類似した詠み方をしている。

そしてこれらの詩語の措辞の指摘できるものが、白詩の 乙 のブロックに集中していることに注視する必要がある。それを更に二重傍線を付した「詩情の類似した箇所」に目を向けると、そこに白詩と道真の詩との差異が鮮明に浮かび上がってくる。

白詩が「伸屈須看蠖／窮通莫問龜／定知身是患／當用道爲醫」と詠う詩情は、道真の詩の冒頭の一・二句「生涯無定地／運命在皇天」そしてそれに呼応する結末の一九七・一九八句「分知交糾纏／命詎質筵篿」に見事に投影されているように思う。そして白詩が「中懷寫向誰」「何人共解頤」と問いかけて、それを「狂吟一千字／因使寄微之」と結ぶ詩情を、道真は「敍意千言裏／何人一可憐」として詠まなければならなかった所に、白居易のように心から信頼し合える元稹のような友を持ち得ぬ悲しみ、「天涯孤独」の絶望感を一層際立たせる句作りとなっていることが明らかになる。ここが道真のこの「敍意一百韻」で訴えたかった核心部分ではなかったのか。その事が理解できれば元稹と白居易の交情を描いた 甲 のブロックの句に道真のこの自作の中に、全く投影箇所を指摘できないのは合点が行く。道真が共鳴し得たのは白詩の 乙 のブロックの詩情に他ならなかったからである。

五

以上長きに亘って道真の「敍意一百韻」を構成論に的を絞って考察してきたが、明らかに出来たことを整理してみる。

一・この詩が五言一百韻の排律で、しかも一韻到底、そして全編に亘り奇数句と偶数句が対句という徹底した